

越生梅林

2月28日（火） 快晴

- ★ 2月中旬から最高気温が10℃を越える日が続き、“春近し”と思っていたが、この日はなんと最高気温が20℃近くまで上がった。快晴・無風で汗ばむほどの陽気であった。
- ★ 常連のメンバーの不参加が多かったが、田無駅に集まったのは10名である。稲門寺子屋で英語を教えている関口和子さんが初めて参加され、紅一点であった。
田無駅10時23分発の拝島行きに乗車、拝島駅でJR八高線に乗り換えた。拝島駅の連絡通路の正面のガラス窓の向こうには、青空の中にくっきりと真っ白な富士山が見えていて、清々しい気分になった。拝島から川越行に乗車、高麗川駅で高崎行きに乗り換えて、越生駅には11時42分に到着した。越生駅では真っ赤なダウンジャケットを着て、真っ黒なサングラスをかけた人物が一行を出迎えてくれた。稲門会会員で、昨年4月に西東京市から埼玉県毛呂山町に引っ越しをされた山本孝之さんである。これで11名の参加者が揃った。
- ★ 越生駅前から黒山行きのバスに乗車した。平日ではあるが、梅まつりの最中であり、天気もよいのでバスは満員で、我々一行は座ることが出来なかった。5分程で「黒岩」という三差路を左へ行くと、道の両側は梅の花ざかりである。10分程で梅林入口に着いた。バス停の周辺には多くの駐車場があり、車で来園する人が多いようだ。入園料400円を払って入場。
- ★ 越生梅林は水戸の偕楽園、熱海梅園と並んで関東の三大梅林と言われているが、他の2つが立派な庭園の中に作られた品格のある梅林なのに対し、ここは平地の中に植えられた素朴な梅林である。梅林は約2haの広さがあり、白加賀、紅梅、越生野梅、蠟梅、山茱萸など約1000本の梅の木が植えられている。梅林周辺を含めると約2万本の梅の木があると言われている。越生の梅は観応元年（1350）、九州の大宰府から現在の小杉天満宮（現梅園神社）に分祀した時に、菅原道真に因んで梅を植えたのが起源であると伝えられている。明治になると観光地として注目され、多くの観光客が訪れるようになったという。梅の花はほぼ満開の状態である。





★ 帰りのバスの時間まで3時間以上あるので、散策の会では珍しいことであるが、ここから2時半まで自由行動とした。ちょうど正午過ぎだったので、全員が目の前にある食堂に入った。狭い入口を入り、食券を買って進むと食堂は野外であった。すぐ目の前は梅林である。暖かい春の日差しを浴びながら食べるカうどんは実に美味しかった。



★ 梅林の園路を歩いて行くと、ひと際大きな古木があった。これは「魁雪」という古木で、1350年に植えられた梅の木のうち1本であると考えられているという。

ここは太田道灌生誕の地で、道灌の父・道真も連歌会で

梅さきぬ なお山里を おもふ哉
と詠んでいるそうである。

園内では「太田道灌を大河ドラマにしよう」ということで、署名活動が行われていた。何人かの方が署名したようである。



- ★ 園内には枯れてしまった木もあるので、新しい木を植えて、枠で囲んで保護している。また、梅の木の根元には福寿草が満開であった。



- ★ 2時半に広場に集合。第2料金所で梅林を出て一般道を歩く。バス等が通る県道は梅林の向こう側を通っているのので、こちらの道は車もほとんど走っておらず、長閑な田舎道である。道の両側には満開の梅の木である。越辺川（おっぺがわ）を渡り、梅園小学校の前を行くとやがて「うめその梅の駅（越生自然休養村センター）」に着いた。ここでは特産品の梅と柚子の加工品や農産物を販売している。ハイキングの休憩所として利用する人も多いそうである。梅のアイスクリームやゆずのジュースなどを頂きながら、帰りのバスを待った。越生行きのバスは午後3本しかなく、3時51分発が最終バスである。このバスに乗車、幸い全員が座ることが出来たが、梅林入口から乗った人の多くは座れないほどの混みようであった。
- ★ 越生駅に到着したのは4時12分頃、JR八高線の高麗川行は丁度発車したところで、次は5時5分発である。そこで東上線を利用して、坂戸乗り換えで川越市駅まで行き、本川越から西武線で帰ってきた。有志7人は所沢駅で下車して、更に楽しいひとときを過ごした。



今回は3人の俳人から俳句を頂きました。

枝垂れ梅 うな垂れでなく しおらしさ

白梅が 虹を一匹 包み込み

十一人 三度乗り換え 梅の里 金子正男

梅の里 鳴戸うどんと ワンカップ

老梅や 曲がりくねりて 八十路かな

紅よりも 桃色が好き 枝垂梅 桑田青三

満開の 梅の老木 ひとを寄せ

梅の花 紅白みだれ 乱舞かな 水野博司

梅林には投句箱が設置してあり、来場者が詠んだ俳句を受け付けていた。
昨年の優秀作品が短冊に清書され、掲示されていたので、その中からいくつか紹介します。

梅古木 朽ちて幹より 咲く一枝

遠い日へ 誘う香り 梅一輪

純白の 春告草の 立ち姿

春の香を 今日も集めし 投句箱

白梅を 囃し立てたる 群雀

参加者 緒方章、勝山成男、金子正男、桑田制三、小島恕雄、中島克三、原田一彦、
牧野昭夫、水野博司、山本孝之、関口和子 以上11名

写真と文 小島恕雄